

巻頭言

「共通理性」と教育

Preface:

Common Reason and Education

宮 寺 晃 夫*

Akio MIYADERA

偏在する理性

ジョン・ロックの教育論に関する院生の修士論文を指導していて、「理性」(reason)という言葉が、とてつもなく汎用性のある言葉であることに、いまさらながら気づかされた。この言葉は、たんに人間の本質を表わすときにつかわれるだけではない。生命や自然についても、社会や制度についても、思考や科学についても、信仰や倫理についても、ひろくつかわれる。どうやら、理性の住みかは、人間の魂のなかだけではないらしい。理性は、自然・制度・科学・宗教・倫理など、さまざまところに偏在しているようだ。

見る・聞く・触れる・味わうなどさまざまな感覚をつらぬく感性の見識は、哲学では「共通感覚」(common sense)と呼ばれ、一般には「常識」と呼び慣わされている。これに倣うと、さまざまな領域にまたがる「理性」の汎用性は、「共通理性」(common reason)など呼んでもいいようなものを類推させる。だれかある人の行為について、それは理性にもとづいている(つまり合理的だ)などといわれると、わたしたちは、幾何の証明問題に理にかなった解法があるのと同じように、なにかしら人為を超える当為や法則性をそこに感じてしまう。あたかも理性は、万物を統べる創造主が、人の内部に組み込んでおいた概念装置のようなもので、それがあから、被造物のなかに創造主の作意が読み取れる。それがはたらくから、さまざまな領域のことがらがバラバラではなく、なにかしらつながりのあるもののように映る。現実界のできごととも、あるがままの姿で見えるばかり

※筑波大学大学院人間総合科学研究科

でなく、ゆがみもまた見えてくる。わたしたちは、たんに眼球の水晶体で光を屈折させて、現実の写像を網膜上に得ているだけではないのだ。現実はこのままでよいのか、というメタ的観察も同時にはたらいってしまうが、それも理性のなせるワザかもしれない。

このようにいうと、哲学オタクの理屈をこねているだけに思われるかもしれない。しかし、ギリシア語の「ヌース」や、ラテン語の「ラチオ」や、朱子学の「理」などのような、現代語の「理性」につながる用語の伝統は、日常語のなかにも生きている。それに託して、多くの人が、現実のなかにあって現実を超えるものの存在を留保してきた。すくなくとも、歴史のある段階までは、真面目にそのように考えられていたし、現代でも、「理性」という言葉には、そういう思考習慣が引き継がれているふしがある。

大文字の理性

理性のはたらきがあるから、わたしたちはものを見たり、考えたり、おこなったりするときに、あるべき姿を思いうかべることができる。売り物の値段が「リーズナブル (reasonable)」だとされるのも、創造主の目から見て、妥当な値段だからなのかもしれない。理性はわたしたちの内部にも、わたしたちの間にもはたらいっていて、創造主の代わりにしてくれる。そうした理性を、わたしたちと共有していると認められるかぎりでは、遠方からの来訪者も、同胞として迎え入れる。こういう理性への信頼が、神への信仰に近いものであることは、ロックがしばしば「理性」を大文字で 'Reason' と綴っていることにも、表われている。人びとは、それぞれ独自に、小文字の 'reason' を心のうちに宿しているだけではないのだ。みんなで一緒に、大文字の 'Reason' に与っている。それを筆者の造語で表わすと、「共通理性」となるのだ。

しかし問題は、共通理性を、人為で手なずけていこうとするときに生じる。教育によって理性を育てようとする試み—ジョン・ロックの教育論はそれを目ざしていた—も、そうした試みの一つだが、それでも、一人ひとりの子どもに、その子なりの見方、感じ方、考え方を育てていこうとするかぎりでは、問題は表に出ない。将来の大人に、自分の心と体をしっかり管理させ、自分の利益を自分で護れるようにしてやることは、だれにでも必要なことだからだ。しかし、子どもたちの教育を、共通理性の指図にしたがって、国家ぐるみで統一的にいとんでい

こうという人が現れると、事情がちがってくる。共通理性の指図を、だれがいったい見抜くことができるのであろうか。創造主のはかりごとを、だれがいったい言い当てるのであろうか。

創造主の恩寵に身をゆだねずに、人びとを自律した「理性的存在」に育てていこうとした近代の教育制度は、そのはじまりから、危うさを抱えこんでいたのだ。

理性への不信

古来、多くの神学者、哲学者、思想家は「神の存在証明」という難問に悩んできた。それはよく知られているが、同じように多くの人が、理性についても、その実体をとらえることに腐心してきた。そうしたなかで、理性の正体の捕捉をそうそうに断念して、理性とは名前だけのものにすぎない、としてしまった人もいる。そうした唯名論（ノミナリズム）の立場の人は、つぎのようにいう。人びとが「理性」の名のもとで語っているのは、語る人（騙る人？）の思いこみにすぎないから、信用できない。それは人を惑わすだけだ、と。現代でいえば、経済学者フリードリヒ・ハイエクがそうした理性不信をふりまいていることで、よく知られている。

ハイエクが批判したのは、理性のはたらきを一つの全体として一元的に見ていくことである。理性が指し示す法則をつきとめて、人の成長を統一的にうながそうとすることである。このような考えを、ハイエクは「理性の濫用」だとみなした。ハイエクはまた、理性の導きにしがたって、社会のすみずみまでを設計していく考えを、「集団主義の傲慢」だとも呼んでいる。ハイエクからすれば、大文字の理性などはどこにもないのだ。「理性」の名で呼べるものがあるとすれば、それは、自己利益の拡大を図る、一人ひとりの個人の意識と努力のなかにあるだけで、そうした小文字の理性がしたがうべき大文字の理性などはない、というのだ。

ハイエクが共通理性にたいして不信感をあらわにしたのは、全体主義にたいする警戒心からである。その全体主義に、社会主義がふくまれていたことはいうまでもない。社会主義国の末路がそうであったように、小文字の‘reason’を導く大文字の‘Reason’を呼び込むと、それを導く、さらに強力な指導力を有する理性（‘REASON’とでも表記すべきか）を呼び込まなければならなくなる。この果てしないさかのぼりは、けっきょく、理性を手はずける権力装置を祀り上げることになり、一種の非合理主義に陥ってしまう。理性の濫用は、理性の自己

否定に道を開いてしまうことになる、というのだ。そこで、共通理性をバラバラに解体して、個人に宿る小文字の理性だけにたよることにする。そうした小文字の理性の相互作用のなかから、社会は生まれてこなければならない。そのような「自生的に成長してくる」社会にハイエクが期待をかけていたことは、よく知られていよう。

一人ひとりに宿る小文字の理性のはたらきに、社会全体の秩序の生成を期待していく。こうしたミクロなものからマクロなものを積分していく考えは、生物学者リチャード・ドーキンズの「利己的遺伝子」の着想にも通じる。一般には、種の類的行動は、目的論的なプログラムにしたがって理解され、進化のプロセスに沿うものとして説明される。ヘイタイ蜂が、自分は死んでも敵にひと刺しするのは、群れを護るためだ、などと。そうした利他主義的な目的論を、ドーキンズは非科学的だとして斥けた。「利己的遺伝子」論では、個体の行動を超えた種や類のふるまいには、目を向けない。あくまでも、個体の自己利益的な行動にのみリアリティーをみとめていく。個体の自己利益的な行動—たとえば、猿は餌を奪いあって食う—は、たとえ他の個体にたいして、どんなに排他的なものであっても、それらが寄せ集まると、なんらかの秩序が生み出されてくる。この秩序のなかでは、猿のなわばりがそうであるように、個体の自己利益的な行動はなんらやましいところがないものとされる。

共通理性の培養地

経済学と生物学から引いた上の事例は、それぞれの領域では、それなりに合理性をそなえた議論として、評価を受けているのかもしれない。じじつ、ハイエクは1974年にノーベル経済学賞を受けている。それでも、わたしたちは、これらの議論に通底する考えに、なにかしらそのまま呑み下すことができないものを感じる。仮にこの考えを他の領域に当てはめてみると、不都合なことになりかねないからだ。これらの議論がそのまま受け入れられれば、社会と全体の秩序の形成を方向づけていく必要はなくなり、個人と個体の自己利益的行動にまかせておけばよいことになる。この考えは、結果の正当性を市場での決済にゆだねる、市場原理主義にどこか似ている。

経済や生物の領域内では説明がきれいに成り立つことでも、他の領域—わたしたちのばあいでは、いうまでもなく教育という領域だが—からすれば、どこ

かおかしいと直観されることがある。この直観をもたらしてくれるのが、共通理性である。共通理性とは、共通感覚がそうであるように、それぞれの領域で当てはまることを、一度、他の領域に当てはめてみて、どれだけ当てはまるかどうかを確かめてみる見識のことだ。経済学や生物学で当てはまることでも、教育学に当てはまるかどうかはわからない。そうした領域の境目を越えた判断を可能にしてくれる、いや、必要としているのが、共通理性なのだ。

教育の領域でなされるいとなみの正当性は、共通理性によって支えられていなければならない。と同時に、教育は共通理性の重要な一角を占めており、それを通すと、他の領域のいとなみ、とくに経済や政治の領域のいとなみのゆがみや独りよがり直観される。教育学は、さまざまな領域にまたがる共通理性を、ひろくはぐくむ培養地（セミナー）なのだ。良識を育てる学問だ、と言い換えてもいい。危うさを抱えながらも、国家の教育制度が持ち堪えられてきたのは、教育学がつねに共通理性の目で見張ってきたからだ。そうであるから、教育学研究の停滞はゆるされないことなのだ。